

日本画による西洋解剖図の模写についての考察

—— 大阪帝国大学の大型解剖掛図を中心に

高田 嘉宏 (大阪大学)

本発表は、大阪大学医学科が管理する手描きの大型解剖掛図が医学教育の現場でどのように制作され、受容されてきたのかについて論じる。大阪大学には銀杏会館(大阪大学医学部学友会館)があり、ここに医学史資料室がある。この資料室の収蔵庫には明治から昭和初期にかけての医学資料が数多く保存されている。最近の調査によって、この収蔵庫から大型解剖図(1m×1.2m)が361枚、収蔵されていたことが判明した。この解剖掛図は医学科の講義用教材として使用されていたものである。かつて医科大学にあった古い解剖掛図の多くは破棄されており、この学術資料が現存していることはめずらしい。したがってこの解剖掛図は医学教育史における貴重な第一次資料といえる。

解剖掛図は2019年ごろから、全国の旧帝国大学で調査され相次いで調査されている。たとえば上田啓未・堀井美里・堀井洋・古畑徹「水野掛図 解剖学・生理学編」(2016年)では、解剖学・生理学に分類された掛図の報告がされている。教育史では、古谷貴子「明治初期の視覚教育メディアに関する考察」(2008年)にて教育用掛図が論じられ、また蔵田愛子『画工の近代』(2024年)では、明治期に東京大学で植物画を描いた画工たちを詳細に取り上げられている。このような研究は少しずつ増えてきている。

こうした先行研究を踏まえて大阪大学の解剖掛図の特徴について論じる。阪大の解剖掛図は現在、361枚確認されており、これは3期に分かれている。それは明治~大正時代(初期)、戦前(中期)、戦後(後期)にタイプが分かれ、それぞれの作風は異なる。本論では、特に大正時代に描かれたとされる初期の解剖図に焦点をあてる。この解剖図には日本画の顔料が使用されていることが、文化財科学の分光測定から明らかになっている。またこの解剖図はドイツの解剖書『シュパルテホルツ解剖学』(1907)から模写されていることが、デジタル画像分析から判明している。そして大阪帝国大学の前進である、府立大阪医科大学(1916年)には、校内に解剖図を描くための模写室があり、掛図室、画工室があったことが文献に記録されている。

以上の検討をとおして、本発表では、大阪大学における黎明期の医学教育を明らかにすることにより、大阪帝国大学の解剖掛図の特徴と学術標本を描いた画工の関係を明らかにする。解剖図を描いた画工(画家)による描画は、日本画の模写の技術によって明確さを与えた。これは洗練された知見と画法が人体の構造と機能の仕組みを多くの医学生に伝え、科学と技術によって画像イメージを共有することに貢献した。職人である画工(画家)によって描かれた解剖図は、日本近代美術史の歴史から外れ、科学図譜の立場をとることになった。これによって専門知識にある視覚的な学術標本が学問形成に果たした役割が明らかになった。